

伊勢物語 二十三段 「筒井筒」

おかし、田舎わたらひしける人の子ども、井のもとに出でてあそびけるを、大人になり
にければ、おとこも女も、恥ぢかはしてありけれど、おとこはこの女をこそ得めと思ふ、
女はこのおとこをと思ひつつ、親のあはすれども、聞かでなんありける。さて、この隣の
おとこのもとよりかくなん。

筒井つの井筒にかけしまろがたけ過ぎにけらしな妹見ざるまに

女、返し、

くらべこし振分髪も肩すぎぬ君ならずして誰かあぐべき

などいひひて、つゝに本意のごとくあひにけり。

さて、年ごろ経るほどに、女、親なくたよりなくなるまに、もろともいふかひなく
てあらんやはとて、河内の国、高安の郡に、いきかよふ所出できにけり。さりけれど、
このもとの女、悪しと思へるけしきもなくて、出しやりければ、おとこ、異心ありてかか
るにやあらむと思ひうたがひて、前裁の中にかくれて、河内へいぬる顔にて見れば、こ
の女、いとう化粧じて、うちながめて、

風吹けば沖つ白浪たつた山夜半にや君がひとり越ゆらん

とよみけるを聞きて、限りなくかなしと思ひて、河内へもいかずなりにけり。

まれまれの高安に来て見れば、はじめこそ心にくもつくりけれ、今はうちとけて、
手づからいゝがひとりて、筒子のうつわ物に盛りけるを見て、心うがりていかずなりに
けり。さりければ、かの女、大和の方を見やりて、

君があたり見つつを居らん生駒山雲なかくしそ雨は降るとも

といひて見いだすに、からうじて、大和人来むといへり。よろこびて待つに、
たびたび過ぎぬれば、

君来むといひし夜ごとに過ぎぬれば頼まぬ物の恋ひつつぞふる

といひけれど、おとこ住まずなりにけり。

伊勢物語 二十三段 「筒井筒」 *現代語訳*

昔、地方巡りの行商をしていた人の子供たちが、井戸の周りに出て遊んでいたが、大人になったので、男も女も互いに恥ずかしがっていたけれど、男はこの女を是非妻にしたいと思っていた。女はこの男を（夫にしたい）と思いつけ、親が（他の男と）結婚させようとするけれど、（親の言うことを）聞かなかった。そして、この隣の男のところから、こんな歌が送られてきた。

〈筒の形をした井戸の囲いで比べた私の背丈はもう井戸の囲いの高さを越してしまつたらしいなあ。貴女に会わないでいるうちに。〉

女は、返歌として、

〈貴方と長さを比べあつてきた私の振り分け髪も、肩を越えてしまいました。貴方以外の誰のために髪上げをしましょうか。〉

などと歌をやりとりしているうちに、とうとう長年の望み通り結婚した。

さて、長年経つうちに、女は、親が亡くなり、生活が苦しくなつたので、（男は）一緒にみじめな暮らしをしていられようかと思つて、河内の国の高安の郡に、通つて行く所ができてしまつた。そうではあつたが、この昔からの女は、不愉快だと思つている様子もなく、（男を）送り出したので、男は、女に浮気心があつてこのような態度なのかと、不審に思い、庭の植え込みに隠れて座り、河内へ行ったふりをして見ていると、この女は、たいそうきれいに化粧をし、もの思いにふけりながらぼんやりと見て、

〈風が吹くと沖の白波が立つ、その竜田山を、夜中にあなたは一人で越えているのかしら。〉

と詠んだのを聞いて、（男は女を）この上なく愛しいと思ひ、河内へも行かなくなつてしまつた。

たまに例の高安に来てみると、（高安の女は）最初は奥ゆかしいふりをしていたが、今は気を許して、自分でしゃもじを取り、腕に盛るのを見て、（男は）嫌になつてしまい、（高安の女の所に）行かなくなつてしまつた。そういうわけだったので、例の（高安の）女は大和の方を見やつて、

〈貴方のいるあたりを眺めながら待つてゐるわ。だから雲よ、たとえ雨が降つても（あの人がある大和と私がいる河内の間にある）生駒山を隠さないで。〉

と詠むと、やつとのことで、大和（にいる）人（男）が、「行くつもりです」と言つてきた。（女は）喜んで待つていたが、何度も約束を破られたので、

〈貴方が来ようと言つた夜はいつも約束を破られていますので、（もう今では）あてにしないけれど（貴方を）恋慕い続けて日々を過ごしています。〉
と言つたが、男は（高安の女のところへ）通わなくなつてしまつた。